

## 高齢者のボランティア活動および 友人・近隣援助活動に関連する要因

オカモト ヒデアキ  
岡本 秀明\*

**目的** 元気な高齢者には、地域において支える側としての活躍や地域の絆の再生に寄与してもらうことが期待されている。本研究では、高齢者のボランティア活動と友人・近隣援助活動それぞれに関連する要因を明らかにすることを目的とした。ボランティア活動の関連要因の検討については、2006年に報告した大阪調査の追試を兼ねた。

**方法** 千葉県市川市の高齢者（65～84歳）1,400人を無作為抽出し、自記式調査票を用いた郵送調査を実施した。有効回答数755人のうち、主要項目に欠損値のない711人を分析対象とした。分析は、ボランティア活動、友人・近隣援助活動それぞれを従属変数とした2項ロジスティック回帰分析を行った。独立変数は、「家族・経済・他」「健康」「暮らし方の志向性」「技術や経験」「社会・環境的状况」の5領域を構成する計17変数、統制変数は、年齢と性別とした。

**結果** ボランティア活動をしている高齢者は、IADLの得点が高い（ $p < 0.05$ ）、地域に貢献する活動をしたい（ $p < 0.001$ ）、中年期にボランティア経験がある（ $p < 0.001$ ）、親しい友人や仲間の数が多い（ $p < 0.05$ ）、ボランティア活動情報の認知の程度が高い（ $p < 0.001$ ）という特性であった。友人・近隣援助活動をしている高齢者は、地域に貢献する活動をしたい（ $p < 0.01$ ）、若い世代と交流したい（ $p < 0.01$ ）、親しい友人や仲間の数が多い（ $p < 0.05$ ）という特性を有していた。

**結論** 都市部における高齢者のボランティア活動の促進要因として重要なものは、本研究と大阪調査の結果で一致して示された、健康の良好さ、地域に貢献する活動をしたい志向性がある、中年期のボランティア経験がある、親しい友人や仲間の数が多い、ボランティア活動情報の認知の程度が高いことであることが明らかになった。地域に貢献する活動をしたい志向性がある、親しい友人や仲間の数が多いことは、友人・近隣援助活動の促進要因でもあった。元気な高齢者が、貢献活動により地域で支える側として活躍が活発になるには、示されたこれらの促進要因をより効果的に支える取り組みをしていくことが求められる。

**キーワード** 高齢者、ボランティア活動、貢献活動、社会活動、プロダクティブ・エイジング

### I はじめに

平成23年版の高齢社会白書では、「地域における高齢者の「出番」と「活躍」～社会的孤立を超えて地域の支え手に」をテーマに特集が組まれた<sup>1)</sup>。元気な高齢者には地域において支え

られる側ではなく支える側としての活躍が期待されていること、高齢者のボランティア活動をより一層促進する取り組みが必要ことが示され、地域の絆の再生に高齢者にも寄与してもらうことが期待されている<sup>1)</sup>。

高齢者のボランティア活動に関して、平成18年社会生活基本調査によると、65歳以上のボランティア活動の行動者率は27.3%となってい

\*和洋女子大学生生活科学系准教授

る<sup>2)</sup>。ボランティア活動をしている高齢者の特性を統計学的に他の要因を統制して検討した研究によれば、学歴が高い<sup>3)4)</sup>、健康面が良好<sup>4)</sup>、経済状況が良好<sup>5)</sup>、高齢でもボランティア活動できると認識している<sup>6)</sup>、礼拝に出席している<sup>4)</sup>、過去に活動経験あり<sup>5)</sup>などが報告されている。しかしながら、1つの研究のなかでボランティア活動の促進・阻害要因を幅広い領域の調査項目を使用して詳細に検討したものは非常に少ない。

そこで、筆者は、2005年4～5月に大阪市の高齢者（65～84歳）1,500人を対象に調査を実施し、暮らし方の志向性や社会環境的状况も含めた幅広い領域の調査項目を用いて、ボランティア活動の関連要因を多変量解析により検討した<sup>7)</sup>（以下、大阪調査）。ボランティア活動には、同居家族や別居親族、友人・近隣への手助けを含まないものとした。ボランティア活動をしている者の特性は、主観的健康感が高い、地域に貢献する活動をしたい志向性がある、技術・知識・資格がある、中年期にボランティア経験がある、親しい友人や仲間の数が多い、ボランティア活動情報の認知の程度が高い者であったと報告した<sup>7)</sup>。このような結果が他地域の高齢者にも確認できるかを検討する追試が求められているが<sup>7)</sup>、いまだなされていない。

高齢者の生産性（productivity）に着目し、社会を支える側と捉えた概念に、プロダクティブ・エイジングがある<sup>8)</sup>。この分野の実証的研究では、家庭外での無償の活動に関してはボランティア活動に加えて友人や近隣に対する援助活動なども含むのが一般的である<sup>9)</sup>。選択的につくられたり地理的に近い距離に住む人々であったりする友人・近隣に対して、必要な時に高齢者が行う援助活動が活発になれば、そのインフォーマルなサポートにより助かる人が増え、地域の絆の再生にも大きく寄与することになる。したがって、高齢者による友人・近隣援助活動の関連要因を、ボランティア活動とともに、検討することが求められる。

以上に示したことから、本研究では、地域における高齢者の支える側としての活躍に着目し、

第1に、高齢者のボランティア活動の関連要因、第2に、高齢者の友人・近隣援助活動に関連する要因を明らかにすることを目的とした。ボランティア活動の関連要因の検討では、大阪調査の追試を兼ねることとし、他地域の都市部の高齢者においても同様の結果が得られるのか、確認することにした。その際には、調査項目、分析方法、調査の対象者数や実施月などの研究方法が大阪調査とできるだけ同じになるようにした。

## Ⅱ 方 法

### （1） 調査の対象と方法

千葉県市川市の住民基本台帳から無作為抽出した65～84歳の高齢者1,400人を対象に、自記式調査票を用いた郵送調査を実施した。千葉県市川市は東京都心に非常に近い位置にあり、人口や世帯数の多さは県内で有数の都市部である。調査期間は、2009年4月15日から5月27日までであった。有効回答数（率）755人（53.9%）のうち、代理回答を除外し、年齢、性別、ボランティア活動の項目すべてに回答した711人を分析対象とした。

調査の倫理的配慮について、調査対象者の住所氏名等は市川市に調査の趣旨説明をし許可を得て住民基本台帳から無作為抽出したこと、回答データは統計的処理を行い個人を特定しないこと、個人情報がかれぬよう厳重な管理体制をとっていること、調査協力ができない場合には返送せずによりことを調査協力依頼文書に明記した。協力が得られる場合には調査票を無記名で返送を依頼したいことを同文書に明記し、調査票の返送をもって調査協力への同意とみなした。

### （2） 調査項目

#### 1) 活動項目

ボランティア活動、友人・近隣援助活動（家事・手伝い・看病・介護・乳幼児の世話）の2つの活動の状況を「全くしていない」から「週3回以上」までの6つの選択肢で尋ねた。

2) 独立変数

独立変数の調査項目は、大阪調査<sup>7)</sup>と同じく、次の5領域17項目とした。

「家族・経済・他」領域は、配偶者の有無(あり=1, なし=0), 居住年数(10年未満を基準カテゴリーとした2つのダミー変数),

表1 分析対象者の特性

	人数 (%)
年齢・性別	
年齢 (n=711)	
平均値±標準偏差	71.7±5.0
性別 (n=711)	
男性	340 (47.8)
家族・経済・他	
配偶者の有無 (n=704)	
あり	512 (72.7)
居住年数 (n=709)	
20年以上	549 (77.4)
10~20年未満	87 (12.3)
10年未満	73 (10.3)
学歴 (n=706)	
中学校卒業	163 (23.1)
高校・短大・大学等卒業	543 (76.9)
暮らし向き (n=708)	
大変ゆとりあり	24 (3.4)
ややゆとりあり	128 (18.1)
ふつう	406 (57.3)
やや苦しい	113 (16.0)
大変苦しい	37 (5.2)
健康	
IADL (n=704)	
平均値±標準偏差	3.8±0.6
主観的健康感 (n=701)	
非常に健康	86 (12.3)
まあ健康	484 (69.0)
あまり健康でない	119 (17.0)
全く健康でない	12 (1.7)
暮らし方の志向性	
生活に充実感を持ちたい (n=694)	
そう思う	654 (94.2)
新たな友人を得たい (n=694)	
そう思う	308 (44.4)
社会への見方を広げたい (n=696)	
そう思う	492 (70.7)
健康や体力に自信をつけたい (n=698)	
そう思う	630 (90.3)
新たな知識や技術を身につけたい (n=697)	
そう思う	395 (56.7)
地域に貢献する活動をしたい (n=704)	
そう思う	412 (58.5)
若い世代と交流したい (n=695)	
そう思う	315 (45.3)
技術や経験	
技術・知識・資格 (n=695)	
あり	133 (19.1)
中年期のボランティア経験 (n=694)	
かなり・少しした	213 (30.7)
社会・環境的状况	
親しい友人や仲間の数 (n=708)	
7人以上	166 (23.4)
5~6人	155 (21.9)
3~4人	209 (29.5)
1~2人	93 (13.1)
いない	85 (12.0)
ボランティア活動情報の認知 (n=692)	
知っている	114 (16.5)

注 各項目で欠損値がある場合はn=711とならない。

学歴(中学校卒業=0, 高校・短大・大学等卒業=1), 暮らし向き(大変ゆとりあり=5~大変苦しい=1)の4項目とした。「健康」領域は、IADL(手段的日常生活動作; 食事用意, 預貯金出し入れ, 日用品買い物, バス電車利用の4つ; 0~4点)と主観的健康感(非常に健康=4~全く健康でない=1)の2項目とした。

「暮らし方の志向性」領域は、生活に充実感を持つ, 新たな友人を得る, 社会への見方を広げる, 健康や体力に自信をつける, 新たな知識や技術を身につける, 地域に貢献する活動をする, 若い世代と交流するという7項目それぞれについてそのような暮らし方をしたいかどうかを尋ね, そう思う=1, そう思わない=0とした。

「技術や経験」領域は2項目とした。技術・知識・資格は、地域で活動する際に活用できる何らかの技術・知識・資格があるかどうかを尋ねた(あり=1, どちらともいえない・なし=0)。経験は、40~50歳代の時にボランティアをしたかどうかを尋ねた(かなり・少しした=1, していない=0)。「社会・環境的状况」領域は、親しい友人や仲間の数(7人以上=4, 5~6人=3, 3~4人=2, 1~2人=1, いない=0), ボランティア活動情報の認知(ボランティア活動参加機会の情報を同世代の人より知っている=1, 知らない=0)の2項目とした。

(3) 分析方法

ボランティア活動, 友人・近隣援助活動の2

表2 ボランティア活動および友人・近隣援助活動の状況

	人数 (%)
ボランティア活動 (n=711)	
週に3回以上	8 (1.1)
週に1~2回程度	21 (3.0)
月に1~2回程度	44 (6.2)
半年に2~3回程度	22 (3.1)
年に1~2回程度	67 (9.4)
全くしていない	549 (77.2)
友人・近隣援助活動 (n=710)	
週に3回以上	4 (0.6)
週に1~2回程度	13 (1.8)
月に1~2回程度	23 (3.2)
半年に2~3回程度	14 (2.0)
年に1~2回程度	39 (5.5)
全くしていない	617 (86.9)

つの活動それぞれを、活動あり = 1、活動なし = 0 の2値変数に変換し、これらを従属変数とする2項ロジスティック回帰分析を行った。その際、まず、領域ごとに該当する変数を独立変数に投入した (Model 1 ~ 5)。次に、領域ごとの分析で統計学的に有意な関連 (p < 0.05) があった変数をすべて独立変数に投入し、これを最終モデルとした。すべての分析において、年齢と性別 (男性 = 1、女性 = 0) を統制変数

として投入した。

(4) 本研究と大阪調査の研究方法の比較

ボランティア活動要因の検討において追試を兼ねた本研究では、大阪調査の方法をできるだけ忠実に再現した。大阪調査と異なった部分は、調査実施年が4年後であったことのほか、選挙人名簿ではなく住民基本台帳を用いて調査対象者を抽出したこと、調査対象者数が100人減少したことのみとなった。

表3 ボランティア活動に関連する要因

	オッズ比 (95%信頼区間)
家族・経済・他 (Model 1)	
配偶者の有無	0.93 (0.60- 1.43)
居住年数 (基準: 10年未満)	
10~20年未満	0.85 (0.35- 2.06)
20年以上	1.61 (0.82- 3.15)
学歴 (基準: 中学校卒業)	1.43 (0.89- 2.28)
暮らし向き	1.29 (1.03- 1.61)*
年齢	0.97 (0.94- 1.01)
性別 (0=女性)	0.81 (0.56- 1.18)
モデルχ <sup>2</sup> (df)	18.86 (7)**
健康 (Model 2)	
IADL	2.14 (1.07- 4.28)*
主観的健康感	1.71 (1.23- 2.38)**
年齢	0.99 (0.95- 1.03)
性別 (0=女性)	0.87 (0.61- 1.26)
モデルχ <sup>2</sup> (df)	25.58 (4)***
暮らし方の志向性 (Model 3)	
生活に充実感を持ちたい	0.87 (0.34- 2.18)
新たな友人を得たい	1.04 (0.67- 1.60)
社会への見方を広げたい	1.00 (0.55- 1.80)
健康や体力に自信をつけたい	0.74 (0.34- 1.61)
新たな知識や技術を身につけたい	1.26 (0.79- 2.02)
地域に貢献する活動をしたい	5.79 (3.38- 9.93)***
若い世代と交流したい	2.31 (1.52- 3.52)***
年齢	0.99 (0.95- 1.03)
性別 (0=女性)	0.72 (0.49- 1.06)
モデルχ <sup>2</sup> (df)	105.74 (9)***
技術や経験 (Model 4)	
技術・知識・資格	2.07 (1.33- 3.24)**
中年期のボランティア経験	6.16 (4.14- 9.17)***
年齢	0.95 (0.91- 0.99)*
性別 (0=女性)	0.91 (0.61- 1.34)
モデルχ <sup>2</sup> (df)	108.87 (4)***
社会・環境の状況 (Model 5)	
親しい友人や仲間の数	1.50 (1.27- 1.77)***
ボランティア活動情報の認知	6.38 (4.05-10.04)***
年齢	0.95 (0.91- 0.99)*
性別 (0=女性)	0.95 (0.65- 1.41)
モデルχ <sup>2</sup> (df)	107.62 (4)***
最終モデル	
暮らし向き	0.95 (0.72- 1.25)
IADL	2.74 (1.16- 6.46)*
主観的健康感	1.43 (0.95- 2.17)
地域に貢献する活動をしたい	4.90 (2.77- 8.67)***
若い世代と交流したい	1.42 (0.89- 2.27)
技術・知識・資格	1.24 (0.73- 2.11)
中年期のボランティア経験	4.95 (3.12- 7.83)***
親しい友人や仲間の数	1.23 (1.01- 1.49)*
ボランティア活動情報の認知	3.83 (2.23- 6.57)***
年齢	0.96 (0.91- 1.00)
性別 (0=女性)	0.91 (0.58- 1.43)
モデルχ <sup>2</sup> (df)	227.13 (11)***

注 \*\*\*p<0.001, \*\*p<0.01, \*p<0.05

Ⅲ 結 果

(1) 単純集計結果

分析対象者の特性を表1に、ボランティア活動、友人・近隣援助活動の状況を表2に示した。ボランティア活動をしている者は162人 (22.8%) で、このなかでは年に1~2回が9.4%と最も多く、次に月に1~2回が6.2%となっていた。友人・近隣援助活動をしている者は93人 (13.1%) で、このなかでは年に1~2回が5.5%と最も多く、次に月に1~2回が3.2%となっていた。

(2) ボランティア活動に関連する要因

領域ごとに2項ロジスティック回帰分析を行った結果、ボランティア活動をしている者の特性は次のとおりであった。「家族・経済・他」領域では、暮らし向きがよい、「健康」領域では、IADLの得点が高い、主観的健康感が高い、「暮らし方の志向性」領域では、地域に

表4 友人・近隣援助活動に関連する要因 (最終モデルのみ記載)

	オッズ比 (95%信頼区間)
最終モデル	
地域に貢献する活動をしたい	2.26 (1.25-4.09)**
若い世代と交流したい	2.19 (1.29-3.69)**
中年期のボランティア経験	1.62 (0.98-2.68)
親しい友人や仲間の数	1.25 (1.02-1.54)*
ボランティア活動情報の認知	1.31 (0.74-2.31)
年齢	1.01 (0.96-1.06)
性別 (0=女性)	0.66 (0.41-1.06)
モデルχ <sup>2</sup> (df)	55.40 (7)***

注 \*\*\*p<0.001, \*\*p<0.01, \*p<0.05

貢献する活動をしたい、若い世代と交流したい、「技術や経験」領域では、技術・知識・資格がある、中年期にボランティア経験がある、「社会・環境的状况」領域では、親しい友人や仲間の数が多い、ボランティア活動情報の認知の程度が高いという特性であった(表3)。

統計学的に有意な変数をすべて投入して分析した結果、ボランティア活動をしている者は、IADLの得点が高い( $p < 0.05$ )、地域に貢献する活動をしたい( $p < 0.001$ )、中年期にボランティア経験がある( $p < 0.001$ )、親しい友人や仲間の数が多い( $p < 0.05$ )、ボランティア活動情報の認知の程度が高い( $p < 0.001$ )という特性であった(表3の最終モデル)。

### (3) 友人・近隣援助活動に関連する要因

領域ごとに分析した結果、友人・近隣援助活動をしている者の特性は次のとおりであった。「家族・経済・他」および「健康」領域では、統計学的に有意な変数はなかった。「暮らし方の志向性」領域では、地域に貢献する活動をしたい、若い世代と交流したい、「技術や経験」領域では、中年期にボランティア経験がある、「社会・環境的状况」領域では、親しい友人や仲間の数が多い、ボランティア活動情報の認知の程度が高いという特性であった。

統計学的に有意な変数をすべて投入して分析した結果、友人・近隣援助活動をしている者は、地域に貢献する活動をしたい( $p < 0.01$ )、若い世代と交流したい( $p < 0.01$ )、親しい友人や仲間の数が多い( $p < 0.05$ )という特性であった(表4)。

## IV 考 察

ボランティア活動の関連要因の最終モデルにおいて、本研究と大阪調査の結果で一致したのは、地域に貢献する活動をしたい、中年期のボランティア経験、親しい友人や仲間の数、ボランティア活動情報の認知であった。これらは都市部におけるボランティア活動促進要因として特に重要なものといえる。これらの要因に関し

て、貢献の志向性や意義が高い者が実際にボランティア活動をしていることは<sup>5)10)</sup>、極めて妥当な結果といえる。ボランティア経験があること、社会関係が豊富なことについても、ボランティア活動の促進要因であることが指摘されている<sup>5)10)</sup>。「高齢者の地域におけるライフスタイルに関する調査」では、地域活動・ボランティア活動を始めたきっかけとして、自治会・町内会の誘い、友人・仲間のすすめ、活動団体からの呼びかけ、市区町村の広報誌等を見て、という回答があげられており<sup>11)</sup>、社会関係の豊かさや活動情報を得る重要性が示唆されている。

本研究ではIADLが、大阪調査では主観的健康感が有意な関連要因であるという違いがみられた。しかし、IADLと主観的健康感とは、健康面の調査項目という意味において類似している。健康の良好さもボランティア活動の促進要因であり、先行研究と一致した<sup>3)4)</sup>。

大阪調査の結果と異なり、技術・知識・資格は有意な関連要因ではなかった。「高齢者の地域社会への参加に関する調査」の結果では、地域の奉仕活動参加に必要な条件の1つとして、技術や経験が生かせることがあげられている<sup>12)</sup>。しかし、その回答割合の高さは7番目にとどまっている<sup>12)</sup>。ボランティア活動参加において、技術・知識・資格以外の要因が重要であること、技術・知識・資格の有無に影響されにくい環境や地域性があったことなどが、本研究の結果にあらわれたのではないと思われる。

以上のように、ボランティア活動の関連要因を検討した結果、技術・知識・資格を除くと、大阪調査の結果とほぼ同じであった。

友人・近隣援助活動に関連していた3つの要因のうち、ボランティア活動の関連要因と共通のものは2つであった。友人・近隣援助活動がボランティア活動と同様に家族・親族を超えた貢献活動であるため、地域に貢献する活動をしたいという特性が示されたことは、妥当な結果といえる。しかし、オッズ比は2.26(95%CI:1.25-4.09)であり、ボランティア活動での4.90(95%CI:2.77-8.67)と比較するとかなり低かった。地域貢献志向を具現化した援助

活動という形式ばったものではなく、自然な形としての助け合いやこれまでのつき合いに基づいた当たり前の行為として、友人や近所の知り合いに援助を提供している人々が一定程度いるためではないかと考える。親しい友人や仲間の数は、多い方が活動参加に誘われたり一緒に活動することにより、ボランティア活動の場合と同じく、友人・近隣援助活動が活発になったことが推察される<sup>11)</sup>。一方で、親しい友人や仲間の数が多いと、その相手に援助を提供する機会が発生する確率が高くなる<sup>13)</sup>。このことも、活動促進要因となったことに寄与したと考えられる。

若い世代と交流したいという要因は、友人・近隣援助活動のみに示された。同じ貢献活動であっても、若い世代と交流したい志向性のある人は、ボランティア活動というよりは、友人・近隣援助活動をしているということになる。この志向性の内容は「人」について示しているため、友人・近隣援助活動では援助対象が「人」であり、ボランティア活動の対象は必ずしもそうではないことが、友人・近隣援助活動のみと関連する結果になった可能性がある。

本研究の結果から、地域において高齢者のボランティア活動や友人・近隣援助活動による活躍を促すには、第1に、地域に貢献する活動をしたいという思いをなるべく多くの人に持ってもらうように、福祉教育などによる啓発や、活動参加に関心を持ってもらうような取り組みを継続していくことが求められる。第2に、社会関係が豊かになるような、気の合う人と知り合う機会が増えるような、多種多様な対策を実施していく必要があろう。ボランティア活動への関与については、そのほかに、高齢期以前からボランティア経験を持てるような社会的な取り組みを広げていくこと、経験がない者でも高齢期にボランティア活動に気軽に参加できるようなサポートを行うことが有効であろう。そして、様々なボランティア活動の情報を高齢者の関心に合わせて提供できる仕組みをより向上していくことが望まれる。

最後に、本研究の調査の有効回答割合は50%

台であるため、結果の解釈の際には、回答が得られなかった高齢者が4割あまり存在することに留意する必要がある。

本研究は文部科学省科学研究費補助金(19730367)の助成を受けて行った。

## 文 献

- 1) 内閣府編. 高齢社会白書(平成23年版). 東京:印刷通販(株), 2011.
- 2) 総務省ホームページ. 平成18年社会生活基本調査(<http://www.stat.go.jp/data/shakai/2006/index.htm>) 2011.10.21.
- 3) Choi LH. Factors affecting volunteerism among older adults. *The Journal of Applied Gerontology* 2003; 22(2): 179-96.
- 4) McNamara TK, Gonzales E. Volunteer transitions among older adults: The role of human, social, and cultural capital in later life. *The Journal of Gerontology: Psychological Sciences and Social Sciences* 2011; 66(4): 490-501.
- 5) Peters-Davis ND, Burant CJ, Braunschweig HM. Factors associated with volunteer behavior among community dwelling older persons. *Activities, Adaptation & Aging* 2001; 26(2): 29-44.
- 6) Warburton J, Terry DJ, Rosenman LS, et al. Differences between older volunteers and nonvolunteers: Attitudinal, normative, and control beliefs. *Research on Aging* 2001; 23(5): 586-605.
- 7) 岡本秀明. 高齢者のボランティア活動に関連する要因. *厚生*の指標 2006; 53(15): 8-13.
- 8) Butler RN, Gleason HP. *Productive aging: Enhancing vitality in later life*. New York: Springer, 1985.
- 9) Herzog AR, Kahn RL, Morgan JN, et al. Age differences in productive activities. *Journal of Gerontology: Social Sciences* 1989; 44(4): S129-S138.
- 10) Wilson J, Musick M. Who cares?: Toward an integrated theory of volunteer work. *American Sociological Review* 1997; 62(5): 694-713.
- 11) 内閣府ホームページ. 平成21年度高齢者の地域におけるライフスタイルに関する調査結果(全体版)(<http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h21/kenkyu/zentai/index.html>) 2011.10.25.
- 12) 内閣府ホームページ. 平成20年度高齢者の地域社会への参加に関する意識調査結果(全体版)(<http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h20/sou-gou/zentai/pdf/qal13-127.pdf>) 2011.11.02.
- 13) 岡本秀明. 高齢者のプロダクティブ・アクティビティに関連する要因: 有償労働, 家庭内および家庭外無償労働の3領域における男女別の検討. *老年社会科学* 2008; 29(4): 526-38.